

黒島保存地区

黒島の集落は、日本海に面した斜面にあります。その家々は、黒い釉薬瓦と灰色の下見板の外装が特徴です。黒島は、船主と船乗りの村でした。いくつかの住宅には、江戸時代（1603～1867年）に船主が享受した富と地位が反映されています。この集落は、江戸時代中期の約 150 世帯から、19 世紀末までには 500 世帯を超える規模へと成長しました。商船は、大阪から北海道まで沿海を往復しており、船主はこの航路で財産を築き、失いました。

海の危険と豊かさ

「北前船」(北行きの船) と呼ばれる木造船は、18 世紀と 19 世紀初めに、日本海沿岸を航行していました。陸路よりも、海路で物資を運んだほうが速く容易だったからです。船乗りたちは、春に大阪を出発する際、綿、酒、紙、煙草、またその他の商品を船に積み込み、途中の港で売買を行い、かなりの利益を上げました。北海道に着いた船乗りたちは、海産物と昆布を積み込み、大阪まで戻る途中で販売しました。初期の北前船の場合、往復には 1 年近くかかりましたが、かなりの利益を得られる可能性がありました。江戸時代の船主は、往復 1 回につき、現在の 1 億円に相当する金額を稼ぐことができました。

1870 年代までに、船はより大きく、より速くなりました。船は数百トンの物資を運べるようになり、1 年に 3〜4 回往復できるようになりました。船主たちは、日本で最も豊かな商人に数えられており、国中から集めた最高の材料で大きな家を建てることができました。しかし、日本海沿いの気象条件は変わりやすく、常に難破の危険がありました。船主たちは、安全な航海を祈って、寺社に奉納を行い、自身の船の絵を供えました。また、自宅には、飾りのある大きな神棚や仏壇を設けました。

海辺の暮らし

黒島の家々は、日本海からの強い潮風から家を守るために、下見板を使っています。光沢のある黒い瓦は、能登半島の多くの家に見られます。この瓦は、湿気と暑さ寒さに耐え、火災から家を守れるよう、釉薬が厚くかけられ、高温で焼かれています。多くの船主の家は、家の後ろにある倉庫と船との間で荷物を運びやすくするために、海岸に面して建てられています。

旧角海家住宅

角海家は、黒島で最も豊かな船主の 1 つでした。角海家は 1843 年から 1897 年まで活発に事業を行っており、7 隻の船を持っていました。角海家の住宅は修復され、一般公開されています。旧角海家住宅は、「坪庭」という中庭を中心に、前方に事業のための部屋、後方に家族のための部屋が配されています。仏間には大きな仏壇と神棚があり、船主にとっての信仰の重要性を示しています。

住宅の後方にある小さな部屋には、海に面した窓があります。家の主人は、湾内の自分の船が良く見えるこの部屋に、よく座っていたと考えられています。

住宅の後ろには、しっくい壁の倉庫（蔵）が 4 棟あり、一家の最も貴重な財産や商品を、火災・盗難から守っていました。最も大きな蔵には、家具・美術品・着物が入れてありました。他の 3 棟の蔵は、商売のための塩と塩蔵品、小豆、そして米のためのものでした。現在、これらの蔵には、複数の北前船の縮尺模型など、海運に関係する品々が展示されています。こういった模型は、新しい船が完成した際に、船大工から船主に渡されたものです。

旧角海家住宅から徒歩数分の「黒島天領北前船資料館」では、この町の歴史についてさらに学び、黒島の船乗りたちの暮らしと、海運に携わる一家の暮らしについてさらに学ぶことができます。

いずれの施設も、午前 9 時から午後 5 時まで開いています。（月曜日はお休みです。）